

平成 21 年 6 月 7 日現在

研究種目：若手研究（スタートアップ）
 研究期間：2007～2008
 課題番号：19890222
 研究課題名（和文） 都市部多世代交流型デイプログラムにおける世代間交流を促進する支援の開発
 研究課題名（英文） Development of Supports to Promote Intergenerational Relationships in an Intergenerational Day Program for School Age Children and Older Adults in Urban Community
 研究代表者：糸井 和佳（ITOI WAKA）
 聖路加看護大学・看護学部・助教
 研究者番号：30453658

研究成果の概要：

都市部多世代交流型デイプログラムにおける初期の世代間交流の形成過程は、子どもと高齢者が互いに知り合い、高齢者が子どもを迎え入れ、プログラムを通じて感じたことの表現や主張などを通して、会の外で出会ったときに子どもから声をかけるなど関係性の深まりが見られた。世代間交流を促進する支援は、双方の世代の参加者の交流を意図したプログラム準備や運営を行いながら、参加者主体となるような配慮やその場の一体感や安心感がもてるような配慮を行い、その中で自然な世代間交流がなされるような意図的な支援が行われていた。また、参加高齢者一人一人の体調を気遣い、その人にあったフォローをするよう、心がけていた。他の世代間交流施設の支援も含めて共通する内容として、人と人が出会う場所の準備に時間をかけ、交流の核となる世代を定めること、参加者の主体性を重んじることなどがあげられた。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,330,000	0	1,330,000
2008年度	1,350,000	405,000	1,755,000
年度			
年度			
年度			
総計	2,680,000	405,000	3,085,000

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：地域・老年看護学

キーワード：世代間交流、高齢者、子ども、デイプログラム、多世代共生、都市部、支援

1. 研究開始当初の背景

超高齢社会のわが国では、65歳以上の高齢者のひとり暮らしが増加し、2020年には、高齢者世帯の34.4%に達するといわれている（平成18年度高齢社会白書）。ひとり暮らし高齢者の増加は、特に都市部において著しく、高齢者が外出できない原因には、健康生活習慣や独居期間の長さが指摘され（栗原、2003）、ひとり暮らし高齢者の社会的孤立が危惧されている。一方、子どもを取り巻く環境を考えると、少子化や核家族化、地域社会

の変化により、高齢者など異なる世代の人とふれあう機会が少なく、子どもたちの「生きる力」すなわち人間関係を形成し、社会性を育む対人関係をいかに育てるかが教育における課題となっている。

世代間分離による弊害を解消する手段として、世代間交流プログラムが各国で展開され、わが国では1970年代から老人クラブ、保育園児、小学生との間に交流が開始されている。世代間交流に関するわが国における研究では、高齢ボランティアによる子どもへの

絵本読み聞かせ介入研究“REPRINT”が挙げられ、高齢者の主観的健康感や社会的サポート・ネットワークが増進などの効果が報告されている(藤原、2006)。

しかし、世代間交流がどのように形成されていくのか、その形成過程を質的に明らかにした研究は少ない。意図的な世代間交流の場における世代間交流がどのように形作られるかを明確にすることは、交流の特徴を知り、それに合わせた支援につながると考えられる。さらに、どのような要素が交流を促進するのも十分明らかにされていないため、支援者の意見を集約する必要がある。

聖路加看護大学老年看護学では、市民主導型健康生成看護拠点を目指した市民協働型研究の経過から、「地域子どもからお年寄りが継続して集い和む場所」のニーズを見出し、毎週1回の多世代交流型デイプログラムを創設し、老年看護学教員・看護師・地域/学生ボランティアが運営している。そこで本研究は、区民と大学の協働によって創設された本学多世代交流型デイプログラムで起こる世代間交流の形成過程を質的に明らかにし、さらに、世代間交流を促進する支援について開発することを目的とした。

2. 研究の目的

本学多世代交流型デイプログラム「聖路加和みの会」の参加者・スタッフ・ボランティアを対象として世代間交流の形成過程を明らかにし、さらに子どもと高齢者の世代間交流を促進する支援について探究することを目的とする。

3. 研究の方法

研究は、2つの方法を組み合わせて行った。

(1) 本学多世代交流型デイプログラム 聖路加和みの会における世代間交流の形成過程の明確化

研究対象：聖路加和みの会の参加者(小学生と高齢者)及び運営スタッフ、ボランティアのうち研究への同意が得られた者。

用語の定義

世代間交流:プログラムを通して見られる小学生と高齢者間の会話や表情、関心を示す、話しかけるなどの行動や関係性の変化。

形成過程:小学生と高齢者の間に起きた事柄を支援者の観点から時系列にみた一連の流れ。

調査方法

2007年4月~2009年1月まで、毎週1回研究者2名が、エスノグラフィーを参考に参加観察し、交流のみられた場面をフィールドノートに書き記し、保存した。

分析方法

参加観察した内容(フィールドノート)を研究者3名で読み、事象をコード化した。次に意味の類似性によって分類し、サブカテゴリを見出した。さらにサブカテゴリをテーマによりカテゴリ化した。さらにそれらのカテゴリがどの時期に出現するかを分析し、世代間交流の形成過程を明らかにした。

(2) 国内外の世代間交流施設のスタッフへのインタビューやコンサルテーションによる世代間交流を促進する支援の検討

研究対象

国内外の世代間交流を支援している支援者のうち、研究への同意が得られた者。

調査方法

国内外の世代間交流施設への視察やスタッフへのインタビューにより、世代間交流を促す支援について検討した。

(3) 倫理的配慮

本研究倫理審査委員会において、承認を受けた後に研究を開始した。研究対象者に対し、文書と口頭により研究を説明、協力を依頼し、研究への自由参加の権利、及び研究協力しなくても不利益はないこと、個人情報保護などを説明し、研究への同意を得た。また、参加観察においては研究へ同意しない者が関与している場合は、その場面は分析から除外した。

4. 研究成果

(1) 本学多世代交流型デイプログラムにおける世代間交流の形成過程

本学多世代交流型デイプログラムは高齢者16名、小中学生8名が週1回、午後3時間、大学の教室を会場として継続的に集まり、交流する。プログラムは各回異なり、書道、キルト、地域散策、おやつ作りなどである。運営者は、老年看護学教員、専属看護スタッフ、地域ボランティア、学生ボランティアであり、主催者の教員1名と専属看護スタッフ2名は毎週、それ以外はローテーションにて支援を行っている。分析により得られたプログラムで起こる世代間交流として、12のカテゴリを抽出している(亀井、2009)。そのカテゴリが出現した時期やカテゴリ同士の前後関係を考慮し、配置した世代間交流の形成過程を図1に示す。

プログラムを通して【高齢者と子どもとボランティアがお互いを知る】ことから始まり、【共に参加することで刺激をうけた高齢者が素直に子どもに感じたことを表現する】や【高齢者が子どもの居場所を作り迎え入れ

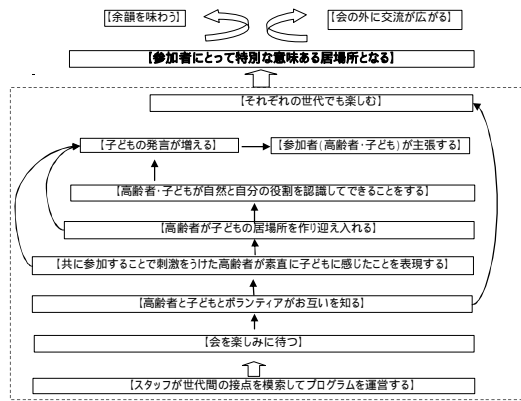


図1. 都市部多世代交流型ディプログラムで起こる世代間交流

【余韻を味わう】が、初期段階（1ヵ月目）からすでに行われている。そうするうちに【子どもの発言が増える】ようになっていく。2~3ヵ月頃より【高齢者・子どもが自分の役割を認識してできることをする】が出現し、6ヵ月を過ぎると【高齢者と子どもが主張する】などの主体的な行動がみられている。時には、【それぞれの世代でも楽しむ】こともある。これら参加者の主体的な行動は、グループ発達の観点からは良い現象と解釈できる一方で、同じ空間でそれぞれの世代が単世代だけで楽しむこともあった。参加者は【会を楽しみに待つ】、会の後に【余韻を味わう】など、【参加者にとって特別な意味ある居場所となる】様子が見受けられた。また、【会の外に交流が広がる】は、高齢者が会の終了後に一緒に出かける、高齢者が新しい人を連れてくる、子どもと高齢者が街中で出会ったときに、子どもから高齢者の名前を呼ぶなどを示しており、これらは、6ヵ月目から参加者より度々報告され、会を継続することで、確実に小学生と高齢者の関係が作られていることが確認された。これらの世代間交流の背景には、【スタッフが世代間の接点を模索してプログラムを運営する】が継続して行われていた。

(2) 世代間交流を促進する支援

本学多世代交流型ディプログラムにおける世代間交流を促進する支援（参加観察結果より）

スタッフの行動をフィールドノートより分析した結果、以下の9つのカテゴリが見出された。スタッフは、(1)【子どもと高齢者の双方の世代を惹きつけるプログラムを準備し、進行する】(2)【参加しやすい場・雰囲気を作る】(3)【参加者にスポットをあて、場の雰囲気を統合する】(4)【高齢者と子どもを仲介する】(5)【参加者の話を傾聴する】ほか(6)【新規来所者を皆に紹介し、会の雰囲気を守る】(7)【会のルールを伝える】(8)【参加者一人一人の体調/ペースを把握し、フォローする】(9)【スタッフも参加者と世代間交流する】などを行っていた。

都市部多世代交流型ディプログラムにお

けるスタッフの支援は、双方の世代の参加者の交流を意図したプログラム準備や運営をしながら、参加者主体となるような配慮やその場の一体感や安心感がもてるような配慮を行い、その中で自然な世代間交流がなされるような支援を行っていた。自らも世代間交流を行い、参加者より教わることもあった。また、参加高齢者一人一人の体調を気遣い、その人にあったフォローをするよう心がけていた（表1）。

表1. 都市部多世代交流型ディプログラムにおけるスタッフの支援（参加観察法）

カテゴリ	サブカテゴリ
(1) 子どもと高齢者の双方の世代を惹きつけるプログラムを準備し、進行する	<ul style="list-style-type: none"> スタッフが双方の世代に合ったプログラムを探る スタッフが世代間交流を意識し工夫する どう進めるかその場でスタッフ同士相談する スタッフが次のアクティビティの用意をする 聞き方を変えてプログラムへの集中を促す スタッフとボランティアが会の前後で課題を出し合う スタッフが笑顔で参加者を見守る 好きなように過ごすよう伝える スタッフが椅子の配置・席順を考慮する スタッフが参加者が参加しやすいように場を設営する スタッフが状況・情報を伝える スタッフがプログラムについて説明する ゲスト講師がやり方を教える ゲスト講師が雰囲気を統合する
(2) 参加しやすい場・雰囲気を作る	<ul style="list-style-type: none"> スタッフが参加者の発言を復唱し、再度皆に伝える スタッフが子どもや高齢者を指名し、促す スタッフが参加者の良さを引き出す スタッフが参加を促す スタッフが会以外の参加者の様子を伝える 前回のプログラムの話題を出して振り返る スタッフが参加者の好みや話題を取り上げる スタッフが先のプログラムについての希望を募る スタッフやゲスト講師が文化の意味を伝え、発言を促す
(3) 参加者にスポットをあて、場の雰囲気を統合する	<ul style="list-style-type: none"> スタッフが参加者に自分の役割を預ける スタッフが参加者からの多様な相談や発言に聞き入る スタッフが参加者の発言を傾聴する スタッフが新しい人を皆に紹介する スタッフがゲストが輪の中に入れてるように気にかける スタッフが参加者にプログラムやゲストを紹介し、同意を得る スタッフが子どもに会でのルールを伝える スタッフが子どもの危険な行動を制止する スタッフが子どもを言葉で叱る
(4) 高齢者と子どもを仲介する	<ul style="list-style-type: none"> スタッフが高齢者の体調を気遣う スタッフが高齢者の体調を気遣う外出時の高齢者の安全を気遣う 一人一人につききり
(5) 参加者の話を傾聴する	<ul style="list-style-type: none"> スタッフやボランティアが自然に交わる 新しいスタッフに異世代（高齢者・子ども）が教える スタッフもアクティビティに参加する スタッフやゲスト講師が子どもを褒める スタッフやゲスト講師が高齢者を褒める スタッフが子どもにお礼を言う
(6) 新規来所者を皆に紹介し、会の雰囲気を守る	
(7) 会のルールを伝える	
(8) 参加者一人一人の体調/ペースを把握し、フォローする	
(9) スタッフも参加者と世代間交流する	

シニア読み聞かせボランティアコーディネーターの支援（インタビュー調査結果）

他世代間交流施設として、東京都老人総合研究所が行うREPRINTSのボランティアコーディネーターの一人にインタビューを行った。インタビュー逐語録より、支援内容を抽出した（表2）。

表2. REPRINTSボランティアコーディネーターが考える支援
生まれ育った地域での自らの人脈・立場・実績をボランティア作りに活かす
行いたい人を見つけて紹介する
その人にあったボランティア活動の種類
ボランティア活動におけるベース作り（環境・規約）を学校と一緒に（学校との折衝）
シニアボランティアのどこをやり達成感をもつことを支える
大人は子どものお手本という自覚を促す
ボランティア活動（運営・個々の達成感）を見守る
子どももシニアも1人の人間として接する
子ども一つでも多く経験や生の体験をさせたい
体を張って子どもと本気で付き合ひ、コミュニケーションを教える
きっかけは大人がつくる
自分の関わった子どもたちが成長するのを見守る
地域の人達全員で子どもを育てる

この世代間交流プログラムの概要は、60歳以上のシニアが、ボランティアとして幼稚園、保育園、小学校、中学校などで子どもたちに絵本の読み聞かせを行うプログラムである。ボランティアコーディネーターは、地域で

の自らの人脈、立場、実績を生かしてボランティアチームをつくり、高齢者がボランティアしやすいよう、学校とともにボランティア活動における取り決めを行っていた。またシニアボランティアのしどころを作り、達成感を支えること、大人は子どもの手本という自覚を促すことを行っていた。子どもに一つでも多くの経験をさせ、社会生活において自信をもって自分の意見を言える子になってほしいという思いから、子どもと本気で接し、子どもの成長を見守ったり、地域の人たち全員で子どもを育てられるよう、環境に働きかけたりしていた。

多世代共生型施設の中学校教員の支援（インタビュー調査結果）

都市部にある中学校、保育園、特別養護老人ホームの複合施設の中学校教員1名にインタビューを行った。支援内容を抽出したものを表3に示す。

特別養護老人ホームへの訪問を中学校の生徒会に持ちかける
活動の核となる子どもを見つける
中学生の主体的な訪問施設との段取りをサポートする
人のためにして感謝されることで思いやりや温かみを知ってほしい
P.T.A.を巻き込む
共生型施設でもお互いの時間帯を合わせることに苦慮する

ここでは、複合施設の理念である多世代共生に基づき、中学生による特別養護老人ホームへの友愛訪問や演奏会、福祉体験などが行われている。

中学校教員は、世代間交流を中学生によるボランティア活動として位置づけ、人のためにする活動を通し、感謝されることで思いやりや温かみを知ってほしいと願い、教育目標としていた。特別養護老人ホームへの訪問を生徒会に呼びかけ、活動の核となる子どもを見つけたり、子どもたちの主体性を伸ばすため、相手施設との段取りをサポートしたりしていた。また、P.T.A.への呼びかけを通し、親も巻き込んだ多世代共生型地域づくりを意識していた。

寺子屋回想法の実践者の支援（インタビュー調査結果）

「寺子屋回想法」は、お寺のお坊さんの「子どもたちに寺子屋を」との思いと「高齢者の生きた体験や言葉を子どもたちに」という臨床心理士の思いが重なって開催された。その創設者1名と実践者1名（計2名）の支援について表4に示す。

ここでは、お寺という古来、人と人が自然に集い交流する場で、10代から90歳代の方々に来てもらい、回想法を取り入れた世代間交流が行われている。

臨床心理士は、人と人が出会う場、来てよかったと思える会を、心をこめて時間をかけ

高齢者のあまりに素晴らしい体験や言葉を若い世代の人にも伝えたい
お寺のお坊様や茶道の専門家、地域の人などとの出会いの中で思いが共通する人と仲間になり、準備する
丹精込めて時間をかけて人と人が出会う場をつくる
参加者がきてよかったと思える会を心をこめてつくっていくことを中心にする
会の枠組みは提供し、そこで思わず話せる場を丁寧に作る
高齢者の話に耳を傾けることで高齢者の心を支えながら、自らも豊かな経験や見方などを受け取る
若者には会の趣旨や意図は繰り返し伝え、あとは、彼らの自発性や自主性を大切にす
自分たちのイメージに学生たちをあわせるのではなく、学生たちの持てる力を発揮してほしいという思いで待つ
高齢者と若者の間にいる自分たちもすぐに変化する
上の世代と下の世代をつないだり、場や器を提供することで、自分たちが受けた経験や知識を還元し、循環させていけるといい
その場でその方なりの一番居心地のいい場をつくっていくことが基本なので無理強いしない
参加者には目に見える効果などを求めず、ここにきて楽しんでもらうことを大事にする

て準備している。その中で様々な知識を持つ異なる分野の方との出会いを大切に、そのプロセスを意味あるものとしている。会の枠組みは提供し、そこで参加者が思わず話せる場を丁寧に作っている。枠組みの一つとして、高齢者の話を傾聴する若者のリーダー育成を行っているが、その際、会の趣旨や意図は説明した上で、若者が高齢者に聞きたいことなどは自発性や自主性を大切にしている。

また、自分たちは上の世代と下の世代をつなぐ中間に位置し、自分たちも得たものを循環させていけるといいと考えていた。

親子キャンプ＜大学生が活動をサポート＞の主催している大学教員の支援（インタビュー調査結果）

ここでは、健康教育のプログラムとして、楽しい自然体験をとおり、いのちや自然を感じる親子キャンプを開催している。地域の小学生を含む親子（祖父母と孫も含む）を対象に、大自然に囲まれた場所でのキャンプを行い、その活動を大学生とともにサポートしている。その会の創設者の大学教員へのインタビューから、支援内容を抽出した（表5）。

複数の親子と大学生が同じ活動をするなかで、横のつながりを支援する
自然の中で楽しい体験をすることで、いのち、自然、自分を感じ、子どもたちに生きる力を育む機会を提供する
基本的に大学生が自分で考えたことを尊重し、彼らの思いで責任もってやってもらい何かハプニングが起きたときは自分が責任を引き受ける
野外活動を通して、普段とは違う親の姿を見て、子どもが尊敬する場面がある
キャンプを通して、親世代も自分以外の子どもにも目が行き、皆で子どもを見守り育てる空気が出来る
それぞれの世代での出し物を企画する
サポートすべきでない健全な関わりでよいと学生に伝える
キャンプを通して家族が自立して来なくなることは良いことだと思ふ
新規の方々にも大歓迎という思いを伝えていく
子どもたちにもルールをみんなで決めさせてこれは守らうというところから始めるという
小学校校長との普段からのつながりでチラシを配らせてもらったり話していて面白いと一緒に活動しようという感じになる

ここでの世代間交流は、主に小学生と大学生、大学生と自分の家族以外の親、親子以外の大人と子どもが考えられる。大学教員は、

楽しい活動をするという趣旨に賛同する大学生に、活動全般において主体性を持たせていた。プログラムの中で大切にしていることは、自然の中での楽しく過ごすことを基本に、オープンな雰囲気や体験学習、自然体験、コミュニケーション（親子、親以外の大人と子ども）ふり返り、分かち合いなどであった。親子に対しては、むしろサポートイ過ぎない関わりがよいと考えていた。

日本世代間交流協会

(<http://www.jiua.org/>) の世代間交流ワークショップ(2009年3月15日)参加者が考える支援

世代間交流協会主催の世代間交流ワークショップにて意見交換を行った。参加者6名による意見を、KJ法により参加者の話し合いで分類した(表6)。参加者は、医師が1名、大学教授が1名、老年学研究員が1名、公立小学校教諭が1名、福祉心理系大学教員が1名、看護大学教員が1名である。

支援者たちは、子どもに焦点をあて、育ちのプロセスをありのままに受け入れるような交流支援、高齢者の健康に配慮するなどを行っており、意図的に世代間交流プログラムを提供する必要性を感じていた。大人も子どもも無理のない世代間交流プログラムの継続、世代間交流活動を日常的に行えるような方策の開発、多様な価値観を味わい、地域住民とともに子どもを育てる意識を持つ必要性、世代間交流の効果のエビデンスを出し、世間にPRする必要性などを感じていることが明らかとなった。

表6. 世代間交流の支援者が大切にしている支援

カテゴリ	データ
子どもにスポットを当てる	子どもの育ちのプロセスをありのまま受け入れるような交流を支援する グループではそれぞれの個性を表現できるように、コーディネーターはきちんと観察し、一人一人にスポットを当てる 高齢者だけの満足に終わらないように支援する 支援者は、最初に子ども側のニーズに合うプログラムや方法を企画、考案するよう心がける 子どもが大人の中にも自分の意見を言えるようにする 子どもが限定された時間と空間のプログラム作りをする(コーディネーターが子どもに声かけだけでも任せると)
自他がお互いを理解する	(初めは)緊張や何を言っても良いの分からないことを感じつつ、自らがコミュニケーションの深度を高める 支援者も自分自身が世代間交流を楽しむ 一人ひとりの人生史をみながらそれぞれ感じている 世代間交流の対象をより多世代化する 自分の価値観と人の価値観は相違することをあじわう 悪いプロセスに子どもたちが触れることができる交流を支援する
大人も子どももコーディネーターも無理のないプログラムを継続する	子どもと高齢者の関係作りをサポートする ・なじみの関係ができるような継続的な関係作りを支援する ・あせらずに関係作りができるように良い目をもつ ・結果がでないと思ってもいつかはなんらかの関係性があると思ってグループを継続する ・高齢者と子どもが関わっているとき、スタッフ(コーディネーター、マネージャー)はそれを見守る 高齢者が無理なく参加することをサポートする 支援者は継続に向けて高齢者のニーズや心身能力(健康)を考慮したプログラム(crush up)する 私は時に社会的、時代的適応にたち客観的に活動を観察するようにしている(安全、時間的制約など) 意図的なものを自然体にする(環境づくりの大変さ) プログラムに依存しない交流のあり方を考える
世代間交流活動を日常に融合する	場を提供しても交流が起こるとは限らないのでスタッフ(コーディネーター・マネージャー)はプログラムを意識する 双方にとってネガティブなことが、ある程度系統だった、かつテーマに一貫性のあるプログラムを遊ぶようにしている 子どもと高齢者が一緒に目的のある活動を行うようにする(それぞれが必ず振り返りをする) コーディネーターが毎回必ず参加者が一人1回話すような決まりきったワンパターンの悪いプログラムを設定する
エビデンスのある評価指標をつくり、世代間交流の効果を実証的に理解してもらい、PRする	支援者は活動が保護者や教師、行政に理解、共感されるようにエビデンスを出し、PRする 高齢者と子どもにおける相乗効果を明確にする 子どもも大人も似ているところもある(リラックスする、集中するなど)ので、あまり分けず価値しない 子どもを支援する高齢者たちに社会的な地位を与える
日本独自の世代間交流を世界に発信する	日本特有の世代間交流を創造する

注: 日本世代間交流協会: 世代間交流ワークショップ2009年3月15日の参加者6名による意見をKJ法を用いて分類した。

引用文献: 亀井智子、糸井和佳、梶井文子、川上千春、長谷川真澄、杉本知子、都市部多世代交流型デイプログラム参加者の12ヶ月間の効果に関する縦断的検証: Mixed methodsによる高齢者の心の健康と世代間交流の変化に焦点をあてて. 日本老年看護学会誌、査読有り、14(1)、2009、印刷中。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計0件)

[学会発表](計5件)

Waka Itoi, Tomoko Kamei, Fumiko Kajii, Intergenerational Exchange and Staff Support in an Intergenerational Day Program for School Age Children and Older Adults in a Japanese Urban Community, The 4th International Conferences on Community Health Nursing Research, August 2009, Adelaide, South Australia.

糸井和佳、亀井智子、梶井文子、川上千春、都市部多世代交流型デイプログラムにおける世代間交流の構造と看護支援 - プログラム開始から1年10ヶ月間の観察より -、日本地域看護学会第12回学術集会、2009年8月、OVTA(千葉県)。

糸井和佳、亀井智子、梶井文子、川上千春、都市部多世代交流型デイプログラムの看護スタッフが認識している支援の内容 - スタッフの語りと参加観察より -、日本老年看護学会第13回学術集会、2008年11月、石川県音楽堂。

糸井和佳、亀井智子、梶井文子、川上千春、都市部多世代交流型デイプログラムにおける世代間交流に対する高齢者の受け止め方、聖路加看護学会第13回学術集会、2008年9月、聖路加看護大学。

糸井和佳、亀井智子、梶井文子、川上千春、杉本知子、長谷川真澄、初期の多世代交流型デイプログラムの活動報告 - 初期の世代間交流の様子 -、日本老年看護学会第12回学術集会、2007年11月、神戸国際会議場。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

糸井 和佳 (ITOI WAKA)

聖路加看護大学・看護学部・助教

研究者番号: 30453658

(2) 研究分担者

該当なし

(3) 連携研究者

該当なし